

(様式3)

「秋田大学研究者海外派遣支援事業」帰国報告書

平成24年3月30日

所属・職名：教育文化学部・准教授

氏名：上田由紀子

派遣期間：2011年2月1日～9月26日

派遣研究機関名：Massachusetts Institute of Technology

：マサチューセッツ工科大学

研究課題：On Functions of the CP System in Language Faculty: a View from Agreement and Related Phenomena

(言語器官におけるCPシステムの機能について:一致現象および関連事象の視点から)

○研究概要(2000字程度)

本研究は、生成文法理論のミニマリスト・プログラムの枠組みに基づいて、人間言語におけるCP領域の機能をより明らかにすることが目的である。

Ueda (2002)の主張する日英語における主語名詞句の統語的位置の違いと数量詞解釈の研究および上田(2007)以来行っているモダリティと人称制限の研究は、これまで独立的な研究として自身で発表してきたが、これら両研究は、実は密接に関連した同じCP領域に関わる言語現象であることに近年気づいた。本派遣期間を利用し、日本語の格付与、数量詞解釈、使役と様々な言語現象を扱い日本語の生成文法研究のエポックメーカーとして研究を発表しているShigeru Miyagawa氏(マサチューセッツ工科大学言語哲学教授)と共に、この人間言語のCP領域の機能をさらに明らかにし、両研究をつなげるCP領域における言語の仕組みを明らかにすべく、表層的に現れる他言語との違いが同じ仕組みのどこからくるのか、また、日本語におけるscrambling(かき混ぜ規則)が発動した際の一見奇妙な数量詞解釈の事実などをいかに統一的に説明できるかを試みた。

MIT言語哲学教授のShigeru Miyagawa氏の元で、様々な言語(英語、日本語、スペイン語、ギリシア語など)のデータを扱ったMiyagawa氏の一連の研究をreviewした上で、Miyagawa(2011)でのアスペクトと数量詞の解釈の研究、スペイン語バスク方言のalloquative Agreement現象と日本語の「ます」表現を同じAgreement現象の一つの現れと主張している研究を採用して、人間言語の数量詞解釈において、数量詞間のスコープ問題となる数量詞が*vP*-phaseの外側に統語的に位置していることが重要なのではないかとまずは考えた。*vP*-phaseに付加されているであろうと仮定されている様態副詞を使い、目的語と様態副詞の語順を変えた際の数量詞解釈の違いを観察した。

(様式3)

また、Rizzi(1994, 2004)やCinque(1999, 2002)のTPとCP内の機能範疇に関するカートグラフィー研究に基づき、日本語のCP構造を真正モダリティ形式が音韻形態的に具現化されて現れる際には、その主語名詞句は題目解釈としては、音韻形態的に具現化されてはならず、義務的空主語にならなければならないことを観察し、その仕組みを提案した。さらに、上記で示した主語名詞句の位置の違いに伴い、Cinque(1999, 2002)で提案されたTP(=IP)領域内の機能範疇は、日本語では、CP領域にあることを真正モダリティ形式と擬似モダリティ形式の時制辞との統語的位置関係を丹念に調べることで明らかにしようと試みた。日本語の擬似モダリティ形式は、Cinqueの主張するTP(=IP)領域内で具現化されるが、真正モダリティは、それを許さない。すなわち、日本語のモダリティ形式は、真正／擬似で現れる範疇を済み分けており、前者は、CP領域の機能範疇の主要部として形態音韻的に具現化され、後者は、TP(=IP)の機能範疇の主要部として形態音韻的に具現化されることを主張した。ただし、モダリティ形式の中には、真正から擬似へ擬似から真正へと言語変化をとげて今に至っているものもあるため、古語からの一連の言語変化を踏まえた上で、真正／擬似の識別を丁寧に行う必要があることも分かった。

今後の課題としては、Miyagawa氏から受けたコメントで、真正モダリティ形式が現れた際の題目解釈の主語名詞句の義務的空主語化は、実は、モダリティ形式が現れず文体変化で表現される英語でも同様に観察される言語現象である。その場合、この義務的空主語化をUeda(2011)が提案するシステムでどのように両言語に対し、統一的な説明ができるのかという疑問を受けた。現在は、CP領域の真正モダリティ形式の統語的位置とその具現化の点からモダリティ表現の異なる具現化を持つ両言語に共に観察される義務的空主語現象をうまく説明するCPシステムを提案しようとして試みているところである。また、Ueda(2011)では、日本語の義務的空主語現象を、主語と文末の真正モダリティ表現とのAgreementの一種と捉えたが、これが、Miyagawa(2011)がAgreementとして捉えたスペイン語バスク方言のAllocutive Agreementに匹敵するものとして捉える事ができるものなのかも今後より丁寧に検討する必要がある。

また、MITでは、認知科学のラボが行っている実験にも積極的に参加してきた。これらは、世界の様々な言語を対象に行われており、私は、日本語母語話者に対する実験に参加した。認知研究の立場からの興味深い報告を受けた中の一つに、ある命題を母語(日本語)で表わしたときとそれをジェスチャーで表わしたときの語順の変化に関する報告があった。実験目的は、手話の起源を解明することにあると説明を受けたが、ジェスチャーの際には、日本語の基本語順が異なる場合があるということであった。ドイツ語は、ジェスチャーでなくとも、主文と補文で語順が異なる。それと同様のことが日本語では、それをジェスチャーで表わした際に観察されたということは、認知研究からばかりでなく、言語理論的にも非常に面白い大変興味深い報告であった。

○研究期間全般にわたる感想

世界100カ国以上からの留学生や研究者を受け入れているだけあり、実に国際色豊であっ

(様式 3)

た。言語も様々な言語が飛び交い、あらゆる面で研究支援体制が整っていた。大学自体の受け入れ体制が完全にシステム化されており、生活や学内での活動に関し戸惑う必要がまったくなく、すぐに日常生活および研究生活に入ることができた。

セメスター中は、様々な研究報告の機会が学生にも教員にも与えられており、昼休みなども含め、週に3回程度は、何かしらのサロンのような研究発表会や読書会が開かれていた。

月に1度程度は、外部から研究者を呼び、講演会が催されていた。その際は、司会から、懇親会の準備までを院生担当し、世界各国からの研究者との交流を行っていた。懇親会場は、院生か教員の自宅が開放され、30人分程度のお料理は持ち回りで学生が作り準備していた。

また、TA 制度も有効に使われており、研究者としてだけでなく、教育者としての訓練も大学院時代に行われていると感じた。



MIT ドーム



言語哲学科が入っている the Stata Center